様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月　４ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１３３９５

研究課題名（和文）共同体の関係「断絶」にみる古代ギリシア世界の外交文化とその変遷

研究課題名（英文）Diplomatic practice and its change in the ancient Greek world

研究代表者
岸本　廣大（KISHIMOTO, Kota）

同志社大学・文学部・准教授

研究者番号：２０８２３３０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ヘレニズム時代からローマの支配下の時期に至るまでの、ギリシア本土の諸ポリスの外交を論じた。具体的には、友好関係の構築や維持、非難の応酬や、対立した関係の修復といった事例を分析した。
その結果、以下の点を明らかにした。(1)ギリシア人共通の過去や、それに基づいて「創られた」ポリス間の関係が外交使節の演説において重要なレトリックとして機能した。(2)こうした使節のやりとりを通じて、そういった「過去」や「関係」が再生産され、ときには変容していった。(3)この「過去」や「関係」は、ローマの支配下に入ってもなお、その体制に適応する形で継続し、それに基づいて、いわば名目的な「外交」が継続した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、従来ほとんど等閑視されてきたヘレニズム時代の使節演説を、文献資料のみならず、碑文資料も用いて総合的に議論した点に学術的意義がある。その結論は、ギリシア世界全体で共有された過去が、外交的な行動規範に影響を与えたこと、そして過去が使節の演説を通じて再確認または再解釈される余地があったことを示した点で、独自性がある。また、外交文化がローマ支配下で名目的にでも継続したことは、ヘレニズム時代とローマ時代を総合的に論じる示唆を提示した点で意義があると考える。

研究成果の概要（英文）： In this research I focused on diplomatic relations and practice of poleis in mainland Greece from Hellenistic to Roman period. From analyses of construction, maintenance, strain, and repairment of their diplomatic relations, I arrived at conclusions as follows:
1) It was common past shared among Greeks and “invented” relations between poleis that functioned as important rhetoric in speeches of diplomatic envoys. 2) Through these communications, “past” and “invented” relations were reproduced, and often changed. 3) Adapted to the Roman rule, the Greek “past” and “invented” continued. In other words, “nominal diplomacy” continued even under the Roman rule.

研究分野：古代ギリシア史

キーワード：古代ギリシア史　ヘレニズム　ローマ　外交　連邦　演説　使節

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

伝統的な古代ギリシア史研究は、ポリス、特にアテナイを主たる対象としてきた。しかし、近年は、アテナイ以外のポリス、そしてポリス以外の共同体（連邦や王国）に視野を広げている。こうした研究は、一つのポリス史ではない、共通の文化を持つギリシア史全体を描き出そうとしている点で意義がある。具体的な研究では、個別の外交的なやり取り（宗教的な使節やプロクセニアなど）に焦点が当てられている。それらは主として外交関係の構築や継続に注目し、共有された政治文化の継続性を強調してきた。しかし、外交的な関係は、競合や対立、その結果としての戦争などによって断絶することもあった。こうした外交関係の断絶が、共有された政治文化の中でどのように正当化されたのか、または正当化しようとしたのか。また関係の断絶はどのように修復が図られたのか。そしてその過程は、古代ギリシアの政治文化にどのような影響を与え、また受けたのか。断絶、そしてそれを経たうえでの関係の再構築までも視野に入れた研究は、従来とは異なる視点から古代ギリシア世界の特徴的な文化（すなわち外交文化）に迫ることができる。

２．研究の目的

本研究では、上で述べた観点に立ってギリシア世界における関係の断絶の事例を分析し、そこに至るまでの実際の経緯を踏まえたうえで、断絶という行為を正当化する言説や行動を可能な限りの史料を用いて考察する。それにより、その言動を規定した当時のギリシアの外交文化を明らかにすることが、本研究の目的となる。

３．研究の方法

本研究では、当初メガラというポリスを中心に、断絶の事例を取り上げ、古典期(前 5-4 世紀)とヘレニズム時代(前 3-1 世紀)の外交文化とその変化を明らかにする計画であった。しかし、調査を進める中で、メガラに関する事例が想定よりも限られていたこと、逆にヘレニズム時代の使節の演説が断絶やそれに伴う関係の再構築を論じる史料として、利用価値が高いことが判明した。また、コロナ禍での海外調査の実施が困難だったこともあり、計画を変更して、ヘレニズム時代からローマ支配下のギリシア(前 1-後 3 世紀)までに対象時期を移し、その中で主にギリシア本土のポリスや連邦、そして小アジアのリュキア連邦の外交に焦点を当ててることにした。具体的には、使節の演説を用いて、ギリシア人が正当化のために用いたレトリックを分析した。その際、歴史叙述の中に引用された演説と、碑文に記録された演説という、史料媒体(メディア)の違いに注意を払った。それと並行して、ローマの支配下に入り、対等な独立国家同士のやり取りという意味での、本来の外交ができなくなった時代における、共同体間のやりとりに注目した。それによって、従来の外交文化の変化を分析した。

４．研究成果

本研究の具体的な成果は、以下の 4 点である。

(1)　ポリュビオスの『歴史』に引用された、ヘレニズム時代のギリシア人使節の演説を分析した。特に過去の語り方に注目したところ、演説を向ける相手の共同体だけでなく、それが属するギリシア人全体への貢献、あるいはそれにもたらした被害を強調し、自らの主張（具体的には議論の対象の擁護や批判）の根拠とした。また、当初バルバロイとして位置づけられたローマ人は、そのプレゼンスの増大をうけて、ギリシア人のために戦う存在へとなり、それに応じて過去の語り方も変化した。また、聴衆の知識や経験を踏まえた過去の選択や、演説者の語る過去を一般的なものとさせるレトリックも用いられていた。以上の分析結果から、演説を通して、ギリシア人としてとるべき外交的な行動規範（自由の重視、過去との一貫性など）が明らかになると同時に、演説に沿って過去が繰り返し提示されることで、過去の再認識や新しい再解釈がなされる余地があったことが示された。すなわち、共通の歴史認識は、外交使節の演説を通じて確認され、あるいは創造されていたのである。

(2)　歴史叙述に引用された演説は、著者の取捨選択や改変の影響を少なからず受けている。その一方、外交使節が持ち込んだ議題についての決議は、使節が行った演説や持参した書簡とともに、碑文に記録されることがあった。ヘレニズム時代によくみられるそのような碑文を分析した。その結果、(1)で確認されたレトリックや外交的な行動規範、聴衆に応じた過去の選択が見られた。と同時に、(1)では見られなかった点も見えてみた。具体的には、使節の提起する過去について、聴衆側で検証されていた。また、こうして記録された碑文自体が、後世において証拠として用いられた。プリエネとサモスの間では、ヘレニズム時代からローマ時代にかけて同じ土地を

めぐる紛争が繰り返され、その際には過去の判決や当時の有力者の書簡、あるいは歴史書が持ち出された。つまり、過去の外交関係とその成果が「再利用」されていたのである。こうした事例は、ギリシア本土のアカイア連邦に属するメッセネとメガレーポリスの紛争からも確認できた。

(3)　小アジアにおいて、ギリシア的な連邦組織を前 2 世紀に発展させたリュキア連邦は、加盟ポリスの間でのやり取りがヘレニズム時代からローマ時代にかけて確認される。その加盟ポリス間の「外交」を分析した。その結果、次の点が明らかとなった。まず、ロドスから独立して連邦が結成された当初、リュキアの諸ポリスは一枚岩でなく、一定の緊張関係があった。そのことは、神話にもとづくポリス間の「親族関係」が、トロスにおいては否定的に捉えられていたことからも示唆される。次に、ギリシア本土の連邦と異なり、ヘレニズム時代のリュキア連邦では、議会の開催場所と宗教的な聖域とが別々の場所にあったことは、加盟ポリス同士の緊張関係を示唆する。こうした緊張関係は、潜在的市民権の交換、いわゆるイソポリテイア条約がリュキア連邦では加盟ポリス同士で確認できることからもうかがえる。最後に、ローマ支配下でもリュキア連邦は存続し、都市エリートはポリスを超えた一体性を持つようになったとされるが、加盟ポリス間で関税が課税されるなど、かつては見られなかった状況がみられるようになった。このことは、ローマの属州になったことによる変化ともされるが、ヘレニズム時代以来の加盟ポリス間の緊張関係を踏まえれば、むしろその継続であり、逆にローマに支配下に入ってようやく（エリート層に限られるとはいえ）統合が進展したとみなせるかもしれない。以上の結論は、従来主張されていたリュキア連邦の加盟ポリスの一体性に疑問を投げかける。むしろそうした緊張関係こそが、加盟ポリス同士あるいは加盟ポリス独自の「外交」が積極的に展開されていた歴史的背景と考えられる。

(4)　ギリシア本土は、前 2 世紀半ばにローマの属州となった。その結果、本来の意味での外交は終わりを告げた。しかしその支配下で、ポリスや連邦は存続し、共同体同士のやり取りも継続していたし、ローマ皇帝や属州総督との交渉も新たに行われるようになった。こうしたやり取りを「外交」とみなして分析し、ヘレニズム時代からの変化を考察した。ローマ支配下では軍事的なやり取りが見られなくなった一方、顕彰や競技祭の再編が主な活動となった。その活動からは、属州という新しい統治体制に適応する形で、ローマ支配以前の過去を継承しようという姿勢が見られた。加えて、そのような「外交」を担った都市のリートが名誉を獲得すると同時に、自身や属する共同体にとって都合の良い過去を、外部に向けて喧伝するようになったことを確認した。従来の外交文化は、ローマの支配に適応しながら変化していったことを示す。

以上の研究を総合すると、以下の 3 点にまとめられる。①ギリシア人共通の過去や、それに基づいて「創られた」関係ポリスの関係が外交使節の演説において重要なレトリックとして機能した。②こうした使節のやりとりを通じて、そういった「過去」や「関係」が再生産され、ときには変容していった。③この「過去」や「関係」は、ローマの支配下に入ってもなお、その体制に適応する形で継続し、それに基づいて、いわば名目的な「外交」が継続した。

それらを踏まえて、全体的な結論は、以下のようになる。古代ギリシアでは外交の場で求められた行動規範は、過去を根拠にしていた。そうした過去や行動規範は、使節の演説を通じて共有された。断絶やそれに伴う関係の再構築でも、それらが重視された。しかし、そうした過去は、聴衆や周囲の状況に応じて、再生産・再解釈されるものであり、それによって得られた外交的成果の記録が、後世にも再利用された。いわば古代ギリシアの外交文化は柔軟性があり、それゆえに、ローマの支配下においてもそれに適応する形で変化しつつ、大枠としては継続しえた。

この結論は、ヘレニズム時代の使節の演説に注目し、また文献資料と碑文資料を総合的に論じた点で、独自性を有する。その結果は、従来の研究成果を補強しつつ、古代ギリシアの外交文化が過去を重視していたこと、そしてそれが時代や状況に応じて変化しうる柔軟性をもつことを明らかにした点で、大きな研究的意義を有する。

今後は、こうしたこうした政治文化が、他の側面、例えば経済や宗教、あるいは政治を離れた私的な国際交流とどのように関係するのか、検証する必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 岸本廣大	４．巻 1
２．論文標題 共感に訴えるヘレニズム世界の国際人	５．発行年 2021年
３．雑誌名 南川高志・井上文則（編）『生き方と感情の歴史学』山川出版社	６．最初と最後の頁 85-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岸本廣大	４．巻 1
２．論文標題 使節の演説における過去の語り――ポリュビオス『歴史』を手がかりに	５．発行年 2021年
３．雑誌名 中井義明・堀井優(編)『記憶と慣行の西洋古代史』ミネルヴァ書房	６．最初と最後の頁 25-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岸本廣大	４．巻 第75巻第1号
２．論文標題 古代ギリシアの連邦と地域	５．発行年 2023年
３．雑誌名 古代文化	６．最初と最後の頁 108-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Kota KISHIMOTO
２．発表標題 How can we study the Koinon in Lycia? Focusing on Its sources and approaches
３．学会等名 Diving into Asia Minor: Multiple Sources for the Hellenistic and Imperial Greek World（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 岸本廣大
２．発表標題 古代ギリシア世界の外交とメディア――演説、決議、書簡
３．学会等名 第9回前近代におけるメディアとコミュニケーション研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 岸本廣大
２．発表標題 ローマ支配下におけるギリシア本土の連邦（コイノン）――アカイアとボイオティアを事例として――
３．学会等名 第88回西洋史読書会大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 岸本廣大
２．発表標題 ヘレニズム時代の使節演説みる過去の記憶
３．学会等名 2019年度西洋史研究会大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 長谷川岳男(編著)、阿部拓児、師尾晶子、齋藤貴弘、澤田典子、髙橋亮介、岸本廣大、志内一興、長谷川敬、池口守、樋脇博敏、南雲泰輔	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 328
３．書名 はじめて学ぶ西洋古代史	

１．著者名 岸本廣大	４．発行年 2021年
２．出版社 京都大学学術出版会	５．総ページ数 388
３．書名 古代ギリシアの連邦――ポリスを超えた共同体	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関